

## 議長賞

堺市立 三国丘小学校 六年

山下 雅仁

### 心を紡いで信じ合える社会へ

僕の住んでいる地域には西日本最大規模の大阪刑務所がある。友達の中には両親が刑務所内で働いている人もいる。以前、関西矯正展という刑務所内部の見学ができるイベントに参加したことがある。

刑務所内部に入る前には大きな扉があり、係員が到着してやっとその扉を通過できたと思ったらまた大きな扉があり、警備が厳重だった。引越してきたときに母が「駅前に刑務所があるなんてなんか怖いね。」と言っていたが、扉はとても高いしきちんと管理されているから、脱走なんてできないし安心して暮らせるのではと感じたことを覚えている。

凶悪犯や反社会的勢力の人たちが刑務所にはたくさんいるので、冷たくごちゃごちゃしている状況を想像して中に入った。見学時は受刑者には直接会わないので本当の雰囲気は分からないが、実際に入ってみるとゴミ一つ落ちていないし、木もきれいに刈られていてピシッと並んでいた。刑務作業場は広くて不要なものは一切なく、整理整頓されていると感じた。近所のおじさんが刑務作

業で制作された木のかごを使っているが、このような環境で作られた物なのだと分かった。展示されていた受刑者の作品は木製の家具や革靴などしっかりした物が多く、社会に戻ったときに役立つ作業をしていると知った。

先日、「日本一長く服役した男」に関する記事を読んだ。六十年間も服役し出所した高齢の男性は支援団体に手配してもらい自立準備ホームで生活することになった。

「寝るとき、何時頃寝るのか？」

「起きるときも、起こしてもらわなきゃいかん。」

と発言するなど高齢だから自分だけで生活するのは大変なのかと思ったが、本当は今まで刑務所の中で命令を受けて行動してきたので指示がないと動けないという理由だった。僕はこれを知ったとき、とても驚いた。悪いことをして刑務所に入ったのだから自由が無くて当たり前だとは思ったが、刑務所に長年いると人間なのに考える力を失うこともあるということに。

他にも記事には誰かに話しかけられてもうなずくことはできる

が、それ以上の会話ができないと書いてあった。自分から話題を提供したり、相手に興味を持ち話しかけたりできないと普通の生活ができないと思った。刑務所では自由を無くしルールを守り、正しい生活のリズムを作る。そして刑務作業を通して、自分のできる作業・仕事を見つけていく。しかしそれも長い年数続くと外の世界の新しい技術や環境から取り残されるし、自分で考えることを忘れ、出所した後の変化についていけない。刑期の終わりの頃には、普段の生活に関する学びを助ける、社会の変化を教える必要があるのではないかと思った。そうすれば再出発を支える人たちもやりやすくなり、働く場所を提供してくれる人も増え、再び犯罪に走ることが減るかもしれない。

僕の友達がもし刑務所に入ることになり、出所してきたらどう思うかを考えてみた。親友ならすぐにお帰りと言って日常生活と一緒に送れると思う。それはなぜかという、ずっと仲良くしていたから信じられるし、悪いことをした理由を理解しようと思えるし、万が一また悪いことをしようとしたらその前に自分が困っていることを聞いてどうしたらいいのか一緒に考えられると思うからだ。

出所してきた人が受け入れられるためには、その人の環境や性格を知り、理解しようと思えることが大事だと思う。そういう社会になるためには、人間には良い面と悪い面があるのだから、嫌

な面だけを見るのではなく良い面に注目する。良いところを見つけてみようと思っても元々好きな人の良いところばかりに目が行ってしまうと思うので、今日はこの人の良い面を探そうと決めてみる。そうすれば今まであまり関わりのなかった人でも関心を持つて接することができるようになり、どんどん知っていける。そのうちお互いに理解しようと思え、お互い心を開いて相談できる関係を築いていきやすい。僕はみんなの良いところを見つけられるように心がけて日常生活を送りたい。

